



〔“鳥瞰図・断面図”の活用〕

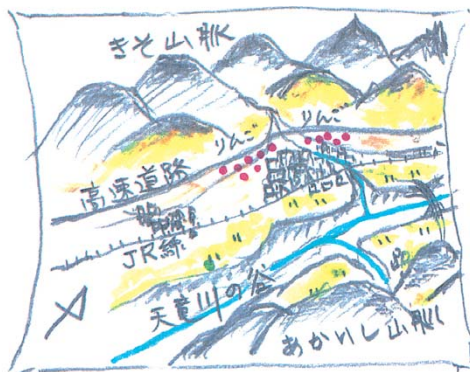
— 地域資料図を“とりつくしま”としてテーマを追う子ども —

東京学芸大学名誉教授 次山 信男

① 今の“東京”を一番よく表す“図”は！

3学期も終わりに近づいたころ、東京の4年生の教室で、Aさんを中心に子どもたちが社会科地図帳を開いて何やら真剣に話し合っていました。先生に尋ねると、「長野県の学校の4年生から送られてきた“絵図”のお返しに、どの図を送ろうか？」という相談なのです。実は、長野県の飯田に同じ4年生の友だちがいるAさんが、電話の中で、いま学習している『わたしたちの東京』の話を出したところ、次のような手紙に添えて、その友だちが描いた“絵図”(鳥瞰的)を送ってくれたことが、この活動の発端なのです。

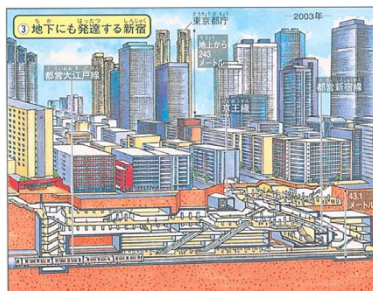
『……ぼくたちの長野県はどこに行っても山が見え、山といっしょにいろいろなくらしが見られます。地図



『ぼくの描いた飯田の絵図』(上)と『菅平のようす』(地図帳p.31の鳥瞰図)(下)

帳(『楽しく学ぶ小学生の地図帳(初訂版)』)にある“菅平のようす”の絵図(p.31②「冷涼な気候とくらし—長野県菅平のようす—」鳥瞰図)が、その持ちょうをいちばんよく表しているように思います。同じ場所で夏と冬の季節によるちがいが、それを活かす人々のくふうなど、ぼくのいる飯田でも同じです。ぼくの描いた飯田の絵図も、地図帳にある“菅平のようす”と似ていませんか?……』

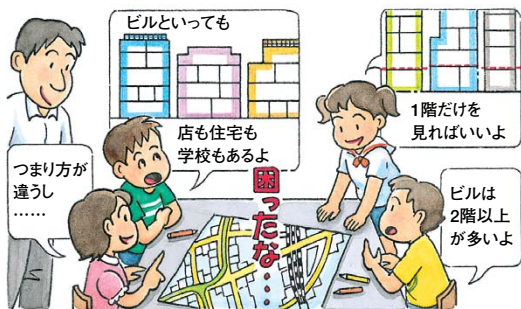
しばらくすると、教室の子どもたちは、東京の都心部のようすを表した“地下にも発達する新宿”の図(p.39③断面図)を選び、それに駅でもらった地下鉄路線網を表した図を添えて、長野の友だちに送ることに決めました。話し合いの中では、同じページにある官公庁や各国大使館が集中的に分布する“東京の中心部”の図(平面図)という声も出ていたのですが、“発達する地下”が、今の東京を一番よく表していると考えたのでしょう。



『地下にも発達する新宿』(地図帳p.39の断面図)

② 横(観察)からの眼と、上(作図)からの眼の“せめぎ合い”!

ところで、ある研究会でのことです。東京のビル街を学区にもつ3年生を担当する先生が、子どもたちが描いた“ビルの絵”を手にしながら、「ビルをビルとして外から見る段階から、ビルの内を見る段階にきて、そのさまざまな内実を、どのように地図に表現す



るかということで、子どもたちも、私も困ってしまったのだが……」という話題を提供されました。「ビルはビルだ!」と片づけてしまわない子どもたちの眼です。その素晴らしい眼を、どのような表現に置き換えることができるかという問題です。ここでは安易な記号化は許されません。この先生は、その事情を子どもたちの話し合いの記録を使って、次のように紹介したのです。

「ビルという記号を考えればいい。」

「でも、ビルの中を調べてみると、店も住宅も学校もあるから、1つの記号にまとめられない。」

「だから、いろいろなものがつまっている建物をビルとすればいい。」

「ビルによって、1つ1つつまり方が違うから、それでも困る。」

「それでは、1階だけを見ていけばいい。」

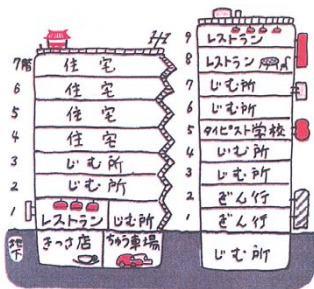
「ビルは2階以上のほうが多いのだから、それではうそになる。」

「困ったな、わからなくなってきた。」

この絵に見られるように、子どもたちは現場との対応の厳密さに向かって、自分の限りを投入して作業を進めようとするのです。

このようなこ

とは、低学年の子どもたちが描いた“地図”を見ても、道路に人が歩き、車が走り、家や店に人がいる……というように、自分が見たものをそのまま表そうとする力が働いている



3年生が描いた『ビルの絵』

のが伝わってきます。自分が移動して次々に見ていくのですから、裏や奥で見たものも、表で見たものと同じように、そこには表現されていくのです。ですから、現場との対応という意味からすれば、低学年の子どもなりに厳密なものになっていることが多いのです。これは、まさに横(観察)からの眼と、上(作図)からの眼との“せめぎ合い”の姿なのです。

③ 頼りになる“とりつくしま”として! —地域資料図は“学習支援図”にも—

社会科地図帳には、4年生の教室の子どもたちが選んだ“地下に発達する新宿”のようなテーマ(福祉・災害・産業・歴史・都市・地形・気候など)をもった絵図(鳥瞰図・断面図など)が、地域資料図としてそれぞれ関係する地域の図幅に配置してあります。それは、「地方の地図」(10万分の1)や「くわしい地図」(50万分の1)に対面しても、問題の糸口や考える糸口が容易につかめなかった子どもたちが、ここで見てきたように、その“絵図”に表現された具体や抽象から容易にその手がかりをつかむことが可能になると考えるからです。

それは3年生や低学年の子どもたちの活動の中にも見られるように、心理的にも自分の経験やそれに伴う潜在的な自分の考えが、あるいは、対象に向かう姿勢や意欲がそれにかみ合い、それに向かって発動し、事実と迫ると共に、見方や考え方もも刺激していくからなのです。

“絵図”の効果は、その強調と省略にあるといわれます。つまり、「見えるものから、見えないものへ」、また「見えないものから、見えるものへ」という具体性と抽象性を兼ね備えていることです。そこにはフィールドワークに見られるのと同様に、一般の風景写真などでは求めることができない強調と省略とが、極めて目的的に働いているのです。この強調と省略こそ、学習しようとする子どもたちにとって、たとえ5年生、6年生になっても頼りになる“とりつくしま”なのです。ですから、ここでの地域資料図は、“学習支援図”でもあるのです。いかがでしょうか。